



## 第4章●子どもの生活

東京学芸大学大学院生

森川浩珠



## はじめに

現代の子どもたちが塾やおけいごとと通いなどで忙しく、時間に追われる毎日を送っている子どもも少なくないということは、第1章を見てもおわかりいただけるであろう。もちろんそうでない子どももたくさんいるが、勉強、勉強と毎日母親から言われ、学校の成績を気にしながら暮らしている子どもが多いのは事実であろう。

さらにこれも第2章で述べられているが、家の外での活動的な遊びから、テレビやテレビゲームを中心とした室内での遊びへと、子どもたちの遊びの形態も変化してきた。

こうした状況の中で、当然子どもたちの生活のようすも昔とは違ったものになってきていると思われる。たとえば、自然の中で遊ぶ機会が少なく、自分で実際に体を動かして何

かをするというよりも、シュミレーション的な遊びをすることのほうが多いため、日常生活においても活動性が少なく、生活体験の貧困な子どもが多いのである。

また一方では、勉強さえしてくればいいからと、しつけのほうは二の次になって、食事のマナーや基本的な生活習慣が小学生になってもなかなか身につけていなかったり、さらには、勉強してもらおうと、子ども部屋から学用品など、子どもがほしがる物を親がどんどん与え、ぜいたくに暮らす子どもたち。

本章では、こうした子どもたちの生活のようすに目を向け、あらためて子どもたちが日常どのような生活を送っているのかみてみたいと思う。

# 1. たくさんの物に囲まれて暮らす ぜいたくな子どもたち



高度経済成長のおかげで金持ち日本、金あまり日本とよばれるようになった現在、子どもたちの生活もやはり、昔とは比べものにならないくらいに豊かになり、家族の中ではむしろ、おとなたち以上に恵まれた環境の下で育っているといえる。

その一番いい例が子ども部屋である。子ども部屋は子どもの城ともいべき存在であり、一步この部屋に入ると、子どもたちは親の目からのがれて自由にふるまうことができる。おとなたちが自分の家を持ちたいと思うように、子どもたちがこの城を持ちたいと思うのは当然である。では実際にどのくらいの子子どもたちが、自分の部屋を持っているのだろうか。

図4-1は、自分の(または兄弟と一緒に)子ども部屋を持っているか、持っている子

どもは「何人でその部屋を使っているか」をたずねた結果である。図が示すように、全体の85%というほとんどの子が、子ども部屋を持っていることがわかる。そしてこの所有率は男子のほうが女子よりやや高く、学年が上がるにつれて増えている。

そして、子ども部屋を持つ85%の子どもたちの中では、ひとり部屋を持つ子どもが31%、兄弟と2人の部屋を持つ子どもが44%、3人以上の部屋を持つ子どもが9%という内訳である。さすがに、自分専用の個室を持つ子どもは全体の3割であるが、とはいっても、地価高騰でうさぎ小屋といわれている日本の住宅事情からすると、この子ども部屋の所有率は、子どもたちがかなり優遇されていることを証明する数字であろう。

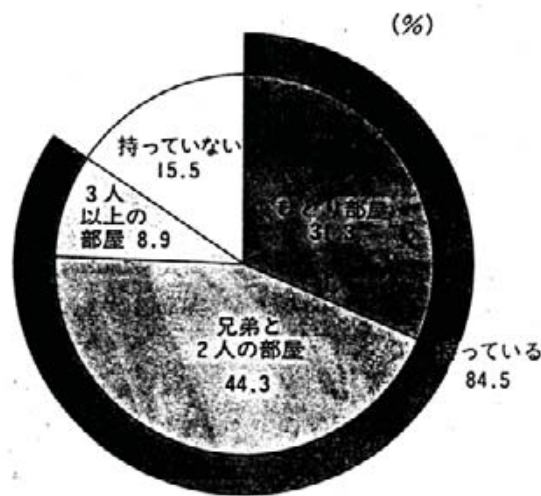
また、子ども部屋をいつごろから与えられ

たかを示したのが図4-2である。「小学校に入ったころから」が48%、「ごく最近」が24%と、親の「独立心を育てたい」、あるいは「勉強をしてほしい」という願いからか、かなりの子どもは小学校入学を機会に部屋を与えられるものようである。

では、そうして親たちがおそらくかなり無理をして用意してあげた子ども部屋を、子どもたちは十分に活用しているのだろうか。

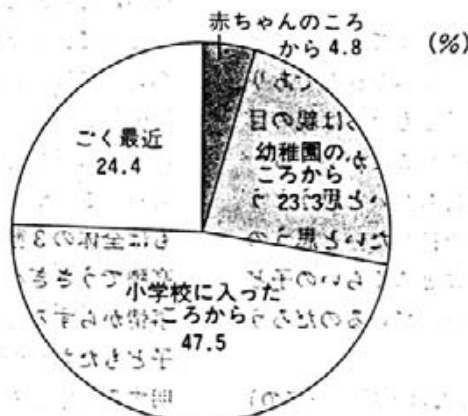
図4-3は、子ども部屋にいる時間(寝ている時間を除く)をみたものである。4時に掃宅したとして、10時までにはほぼ5～6時間

図4-1 子ども部屋の有無と個室かどうか



(vol.4-1「子ども部屋」より)

図4-2 子ども部屋をいつごろから持っていたか



(vol.4-1「子ども部屋」より)



の自由な時間があるだろうが、2時間以下の子どもが5割と、思ったほど子ども部屋は使われていない。とくに、女子よりも男子のほうがその傾向が強い。図には掲げていないが、利用状況でみると、個室で（2時間以内が）50%、2人部屋もほぼ同じ、3人以上の相部屋で54%とほとんど変わりなく、とくに兄弟と同室だと部屋にいる時間が短くなるということもないのである。

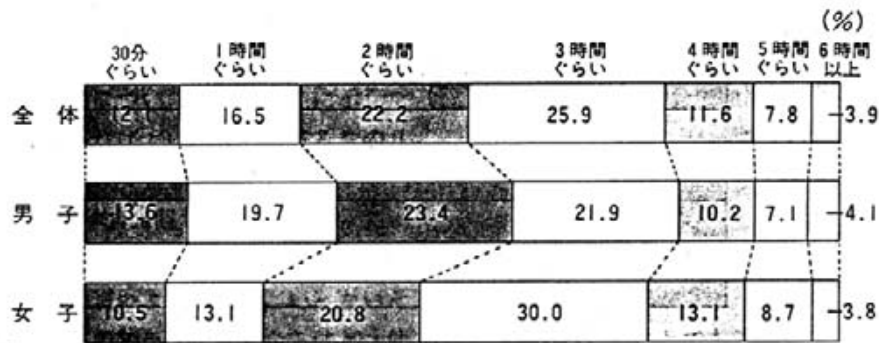
さらに図4-4は、子ども部屋を寝室として使っている者の割合を示しているが、4分の3は子ども部屋を寝室として使っているも

の、残りの4分の1は寝室は別にあって、子ども部屋は専ら勉強部屋や遊び部屋などとしてのみ使われていることになる。

さて、それではそのような子ども部屋の中には、どんな物が置いてあるのだろうか。図4-5は、子どもの身のまわりにあると思われる家具や文房具、メカ類について、子どもたちの所有率を表している。

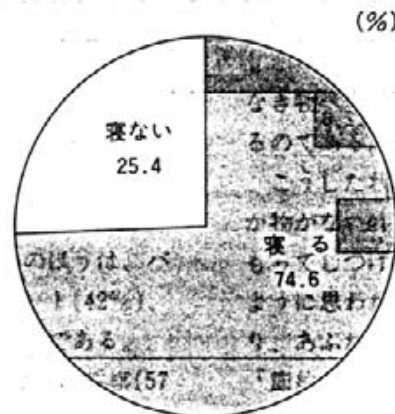
勉強机94%は別としても、本棚73%、ロッカー（洋服ダンス）49%、ベッド42%と、自分局の家具を持っている子どもの割合は多い。

図4-3 子ども部屋にいる時間(睡眠時間を除く)



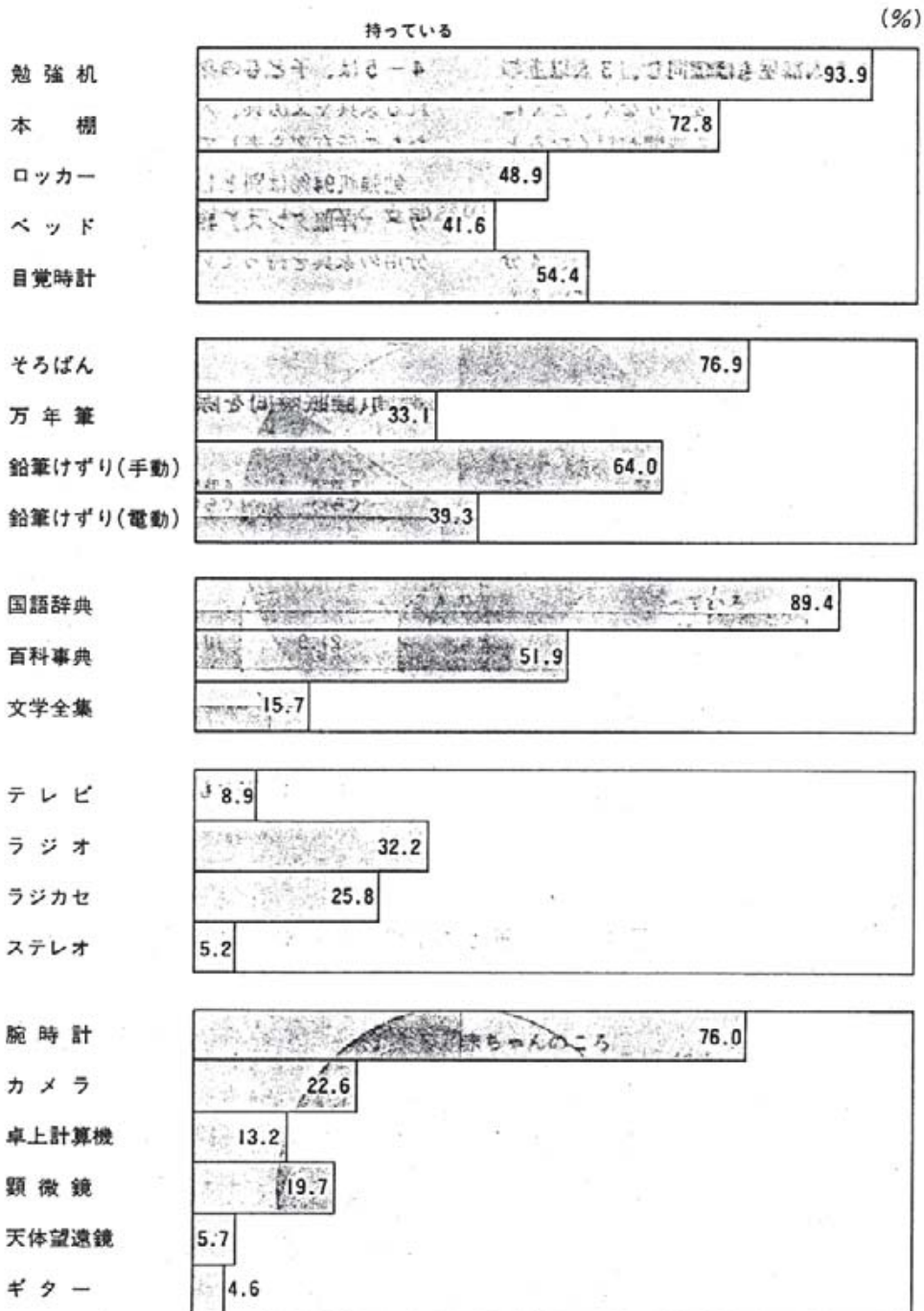
(vol.4-1「子ども部屋」より)

図4-4 子ども部屋で寝るか



(vol.4-1「子ども部屋」より)

図4-5 自分用として持っている物（家具・文房具・メカ類）



(vol.1-10「子どもの持ち物」より)

値段的に考えて、小学生にはそう簡単には手に入らないはずの腕時計(76%)、ラジオ(32%)、ラジカセ(26%)、カメラ(23%)、顕微鏡(20%)も、家にあるだけでなく、子どもたちが自分用の物として持っている割合が高いのは注目すべきことである。これらの物は、当然親やまわりのおとなが買い与えているのだろうが、いくら子どもがほしがるといって、高価な物を小さな子に必要以上に与えすぎではないだろうか。気になるところである。

また、そろばんや鉛筆けずり、国語辞典などの勉強に用いるものについては、3人に2人は持っているわけで、実際に必要かどうかというより、小学生になったらランドセルと一緒にそろえてあげるべき物という意識が、親の側にあるのかもしれない。

さらに学用品については表4-1に示したように、1個あればよいはずのはさみやのり、定規など、平均2~3個持っており、ふで箱となると1人平均4.4個で、6個以上持っている子が36%もいるのである。これは本当に持ちすぎとしか言いようがない。いったいどのように数多くの物を、子どもたちはどう使いこなしているのだろうか。もしかすると子どもたちにとって、これらの物は使うことよりも持っていること、集めることに意味があるのではないだろうか。

性別によって見られる特徴的な持ち物は、スポーツ用品と、洋服・身のまわりの物、オシャレ用品である(図4-6)。

スポーツ用品では、男の子の場合8~9割がグローブ、バット、野球帽という野球3点セットを持っており、他にサッカーボール(39%)、卓球のラケット(32%)、ミット(32%)と続いている。それに対し女子のほうは、バドミントン(69%)、テニスラケット(42%)、バレーボール(27%)などが主な物である。

またゲームや遊び道具については、将棋(57%)、テレビゲーム(25%)、チェス(13%)、碁(13%)が、とくに男子に多い持ち物とな

っている。

逆に女の子だけに高い所有率を示しているのが、鏡(82%)、ブローチ(56%)、ハンドバッグ(54%)、ネックレス(50%)というオシャレ用品で、中には小学生で毛皮のえりまき(28%)、毛皮のコート(8%)、お化粧品セット(8%)といった物まで持っている子もいるのである。

このように、子どもたちの物持ちぶりには目をみはるばかりであるが、彼らはそれでもまだ満足してはいないのである。図には示していないが、先の持ち物調べに使った項目を用いて、とくに自分用としてほしいかどうかをたずねた結果、テレビゲーム(74%)、カメラ(69%)、テレビ(64%)、スニーカー(63%)、ラジカセ(59%)、腕時計(58%)、天体望遠鏡(57%)、スポーツバッグ(56%)、ステレオ(55%)、ベッド(54%)、顕微鏡(52%)の順で、子どもたちがほしがっていることがわかった。これらのほとんどは高額で、しかも、かつてはおとなの専有物だった物である。うっかりすると子どもたちは、やがておとなすら買えない物までほしがるとなるのかもしれない。恐ろしいことである。

しかも図4-7を見るとわかるように、この物への欲求は、物を持っている子ほど強い。つまり、子どもが物をほしがっているときに、その欲求を満たしてやろうと、親たちはついそれを与えてしまう。しかし物を与えれば与えるほど、子どもたちはさらに多くの物をほしがるとなり、逆にそれがいつそあくなき物への欲求を生み出してしまうことになるのである。

こうした状況を考えると、かつての親たちが物がないうちに「節約」ということを身をもってしつけてきたことが、遠い昔であったように思われる。しかし現在、物がありあまり、あふれる時代だからこそ、なおいっそう「節約」や「物を不必要に持ちすぎないこと」を教えていかなければならないのではないだろうか。

表4-1 子どもの持つ学用品の個数

(%)

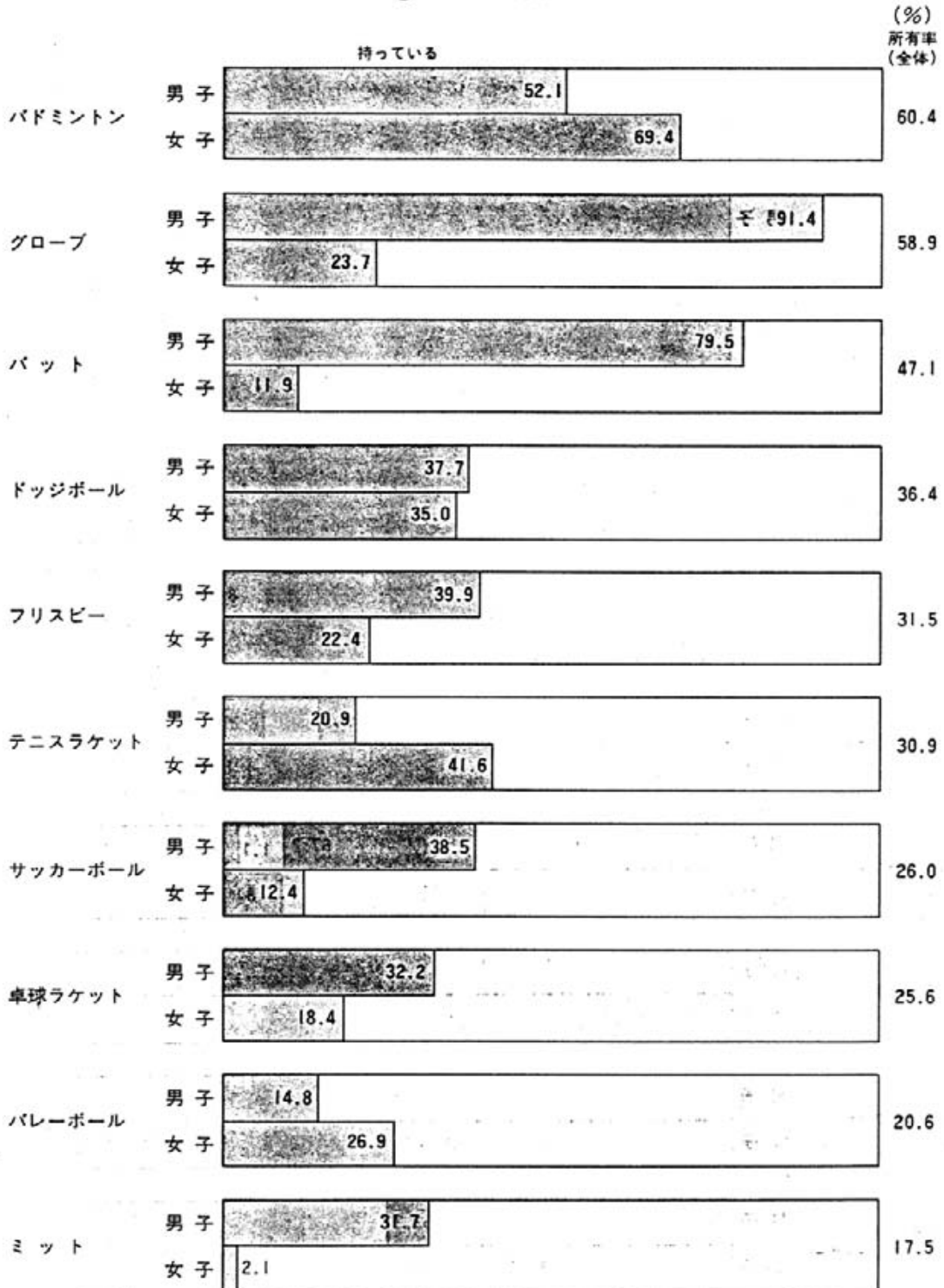
	0個 (持っていない)	1個	2個	3個	4個	5個	6個以上
ふで箱	0.1	5.1	9.8	15.1	16.8	17.1	36.0
定規(ものさし)	0.2	7.7	18.6	23.0	19.4	11.6	19.5
下じき	0.3	6.2	14.3	18.8	15.3	11.5	33.6
はさみ	1.1	27.0	37.1	21.6	7.6	2.6	3.0
のり	1.6	23.8	31.2	23.8	9.9	3.6	6.1
財布	2.1	12.7	24.8	24.5	13.4	9.4	13.1
勉強用の机	3.0	89.7	5.6	1.0	0.5	0.0	0.2
色鉛筆のセット (箱入り)	3.3	31.5	35.9	18.1	7.1	2.3	1.8
クレヨンのセット (箱入り)	7.5	34.9	28.8	17.8	6.7	1.3	3.0
シャープペンシル	7.5	12.5	12.5	13.3	9.8	8.1	36.3
ホチキス	9.8	45.7	30.1	10.3	2.4	0.7	1.0
そろばん	12.5	65.2	16.7	3.6	1.3	0.4	0.3
電卓	36.5	38.4	16.2	5.4	1.9	0.7	0.9
電卓	64.0	26.1	5.2	2.5	1.0	0.8	0.4

(vol.5-12「学用品」より)



図4-6 自分用として持っている物

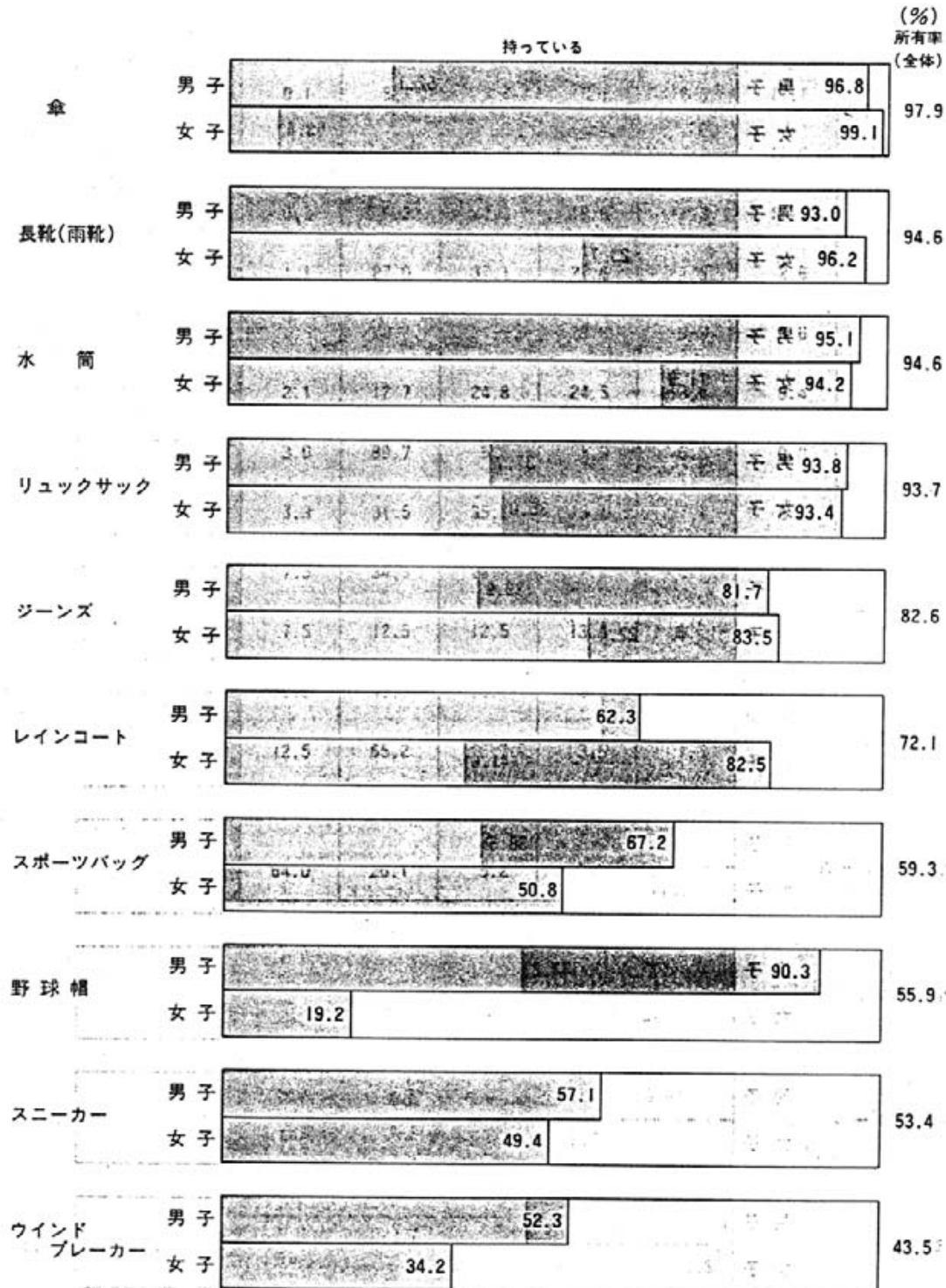
① スポーツ用品



(vol.1-10「子どもの持ち物」より)

図4-6 自分用として持っている物

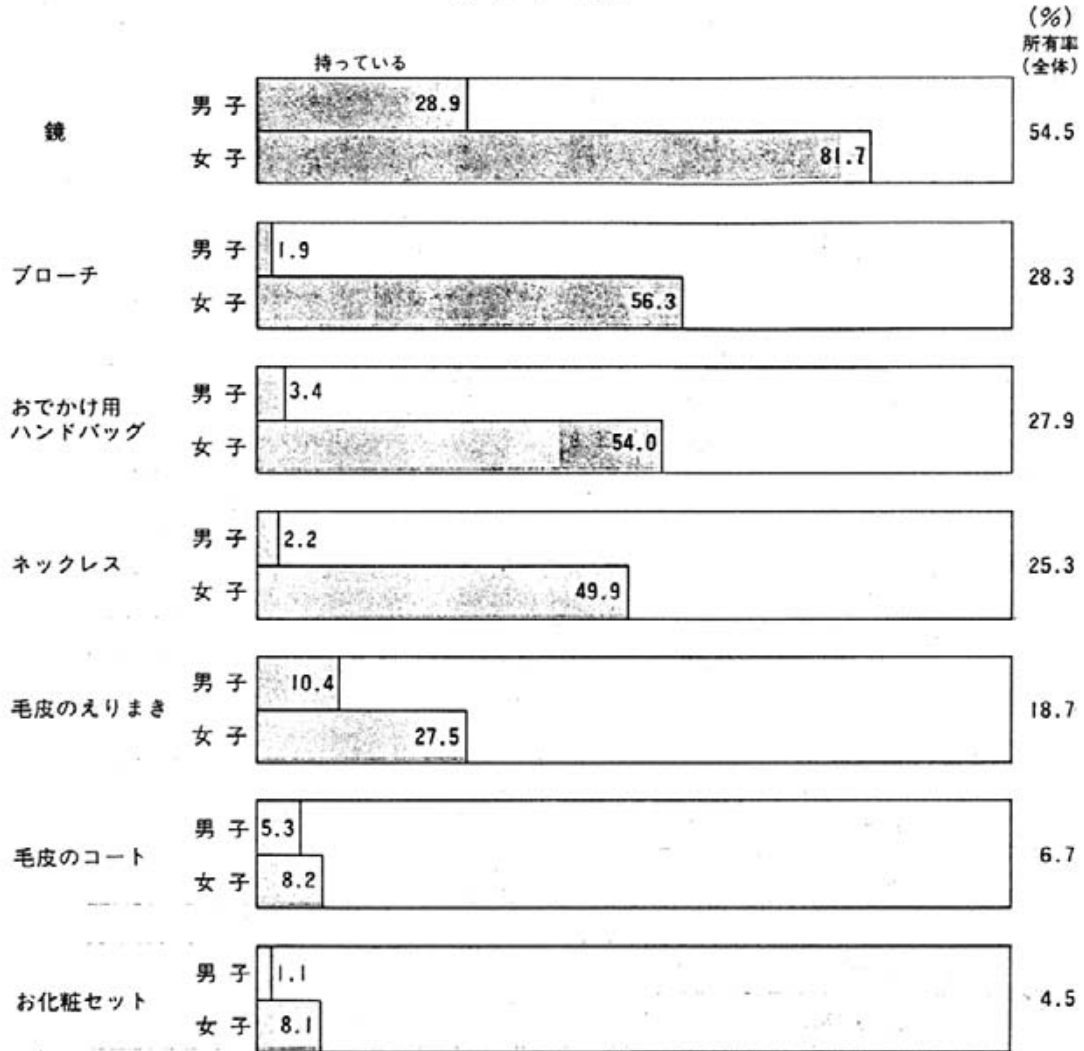
② 洋服・身のまわりの物



(vol.1-10「子どもの持ち物」より)

図4-6 自分用として持っている物

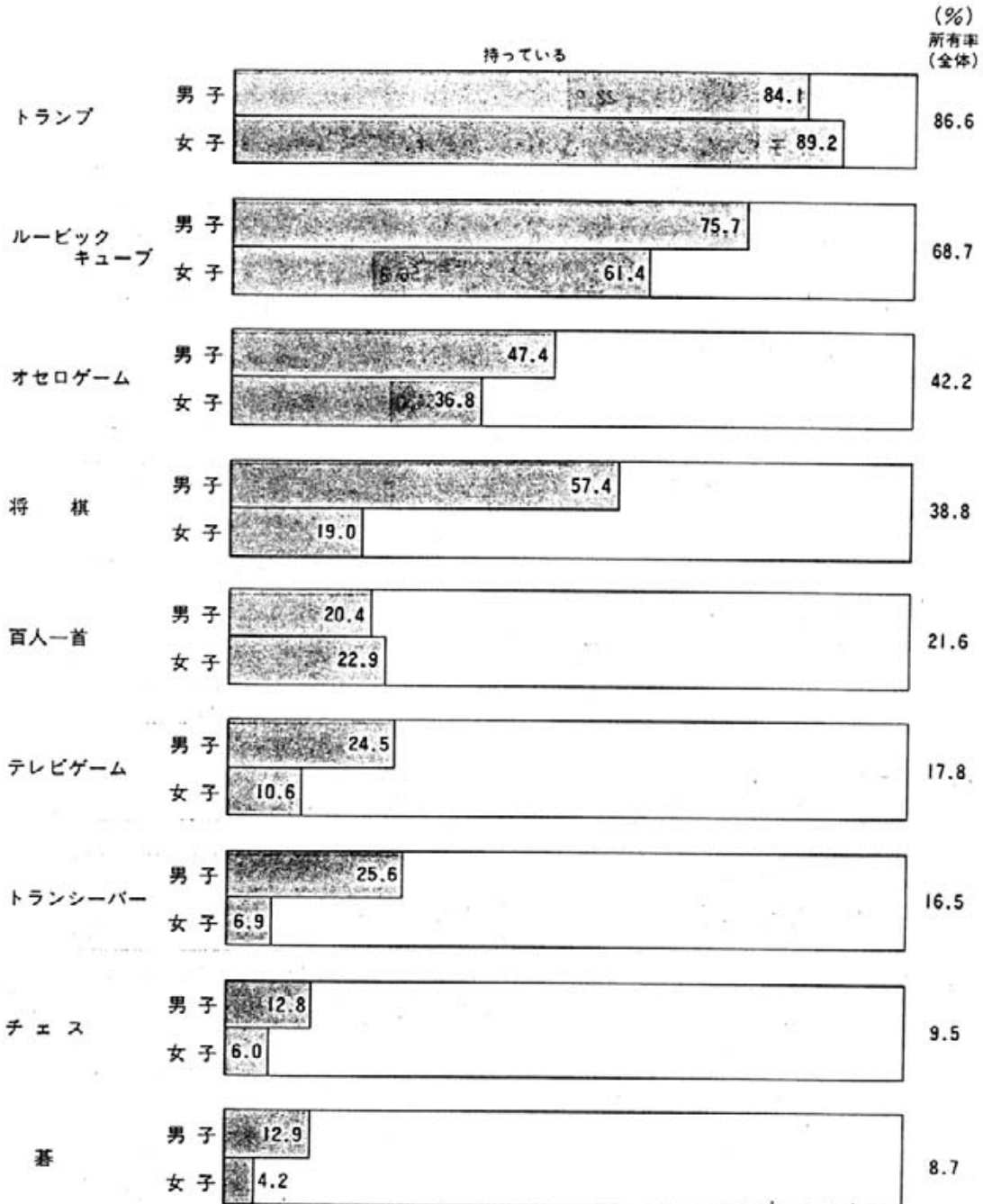
③ オシャレ用品



(vol.1-10「子どもの持ち物」より)

図4-6 自分用として持っている物

④ ゲーム類



(vol.1-10「子どもの持ち物」より)

図4-7 持ち物の数×物をほしいか

	とてもほしい	かなりほしい	まあほしい	あまりほしくない (%)
持たない群	15.0	23.4	26.8	34.8
やや持たない群		24.7	26.5	27.3
やや物持ち群		26.4	26.0	20.8
物持ち群		25.2	21.6	18.3

\*これらは、ほしいかをたずねた68項目について、  
ぜひほしい場合を2点、できればほしい場合を1  
点として加算し、

0-10点……あまりほしくない群 (25.7%)

11-20点……まあほしい群 (25.4%)

21-47点……かなりほしい群 (24.9%)

48-103点……とてもほしい群 (24.0%)

と分けたものである。

(vol.1-10「子どもの持ち物」より)





## 2. 生活体験に欠ける子どもたち



今日、日本中どこへ行ってみても都市化が進行していることを感じる。このことは、おとなの生活にとっては便利な環境というだけで、子どもたちの健康な心身の発達にとっては必ずしも適切とはいえない生活環境が、ますます子どもたちの周囲に広がりつつあることを意味するだろう。

そしてまた別の側面では、過保護・過干渉といわれるような、子どもの生活上のコントロールも、今日いっそう強まっている。

こうした条件のもとで、現在子どもたちの「生活体験」に大きなバランスの崩れが起こっているといえる。

図4-8は、現在子どもたちがどのくらいの生活体験をしているかを示したものである。これらの生活体験の項目は、人間が生活していくために、男女を問わずいわゆる「生活者」として、できなければならないだろうと思われる最低限のことであるが、図を見て驚かさ

れるのは、何といても全体的な量の少なさである。生まれてから「1人でごはんをたく」「魚を焼く」「靴をみがく」という経験の「ほとんどない」子が半数以上もいるのである。また「2、3回ある」というだけでは、体験がどうてい身についてはいないだろうと考えられる。となると、「ごはんたき」は男子の84%、女子の66%、「食器洗い」は男子78%、女子45%、そして「果物の皮むき」が男子58%と女子40%、「ガスコンロの点火」は29%と23%、「かん切りの使用」は23%と28%の子が、自信を持ってできないということになる。このようなことではいざというときに、子どもたちが自分1人で生活することは非常にむずかしく、また危険であるともいえる。

さらに、人間のあまり人工化されていない生活環境下での生活体験（自然体験）については、昔の子どもだったら当然持っていたであろう体験のさらに大きな欠落が見られる。

図4-8 生活の体験

		(%)			
		ほとんどない	2,3回ある	わりとある	しょっちゅうある
1. 1人でごはんをたく	男子	65.0		19.4	8.2 7.4
	女子	40.2	25.4	18.4	16.0
2. 魚を焼く	男子	54.4	25.4	14.4	5.8
	女子	52.0	22.2	17.1	8.7
3. 店屋物の注文	男子	49.6	21.4	18.1	10.9
	女子	58.1	19.9	13.2	8.8
4. 靴みがき	男子	55.9	24.0	13.5	6.6
	女子	44.8	27.3	19.7	8.2
5. 食器を洗う	男子	48.8	29.1	14.2	7.9
	女子	14.0 31.3	31.9	22.8	
6. 手で洗濯	男子	44.3	34.8	16.2	4.7
	女子	14.8 32.3	35.2	17.7	
7. 時計の針の調整	男子	23.3	24.3	31.8	20.6
	女子	32.1	29.8	24.7	13.4
8. 肉の買い物	男子	28.5	23.2	22.9	25.4
	女子	20.4	20.0	30.6	29.0
9. 洗濯物を干す	男子	39.1	31.8	20.0	9.1
	女子	9.4 25.2	40.5	24.9	
10. 家のふき掃除	男子	31.4	34.8	23.9	9.9
	女子	15.9 27.7	38.0	18.4	
11. 果物の皮をむく	男子	27.5	30.1	25.3	17.1
	女子	17.0 23.4	32.9	26.7	
12. 雨戸を閉める	男子	22.9	13.3 23.3	40.5	
	女子	21.9 16.2	21.1	40.8	
13. お茶を入れて飲む	男子	26.2	22.0	27.1	24.7
	女子	8.1 17.6	31.8	42.5	
14. おもてに水をまく	男子	21.1	29.2	32.6	17.1
	女子	10.9 28.2	37.6	23.3	
15. おもちゃを網で焼く	男子	34.7	22.6	26.2	16.5
	女子	32.2	21.7	29.7	16.4
16. ガスコンロの点火	男子	13.6 15.2	27.7	43.5	
	女子	10.3 12.8	28.7	48.2	
17. インスタントラーメンを作る	男子	10.1 13.9	33.0	43.0	
	女子	12.4 21.5	38.9	27.2	
18. かん切りの使用	男子	9.8 12.8	29.8	47.6	
	女子	13.1 15.3	30.2	41.4	
19. 生タマゴを手で割る	男子	14.1 18.6	27.7	39.6	
	女子	10.5 14.7	27.5	47.3	
20. カナヅツでクギを打つ	男子	5.0 13.0	46.1	35.9	
	女子	15.8 35.3	38.8	10.1	
21. 自分で洗髪	男子	5.3 5.3 12.9	76.5		
	女子	4.0 5.1 10.6	80.3		
22. 自分でツメを切る	男子	3.7 5.3 16.7	74.3		
	女子	4.2 12.3	82.4		

(vol. 2-10「生活体験」より)

たとえば、生まれてから1度も「たき火をしたこと」のない子が男子34%、女子43%と3分の1以上で、「雨で全身がビしょぬれになったこと」のない子が12%と23%、「犬や猫にさわったこと」のない子が8%と7%などである(図4-9)。

しかし、そうした自然体験、生活体験の喪失とは裏腹に、近代文明の所産ともいえる、おとなっぽい体験は豊富に取り入れているのである。

図4-10に示したように、「飛行機に乗る」「ヘアードライヤーを使用する」「タクシーに乗る」など、便利な機器を利用することには、30年前の子どもたちとは比べものにならないほどの豊かな体験を持っている。「わりとある」と「しょっちゅうある」を合わせると、「タクシーに乗る」は8割以上にものほり、また「カメラで写真をとる」ことも男子73%、女子64%と、3分の2以上である。

また算数の計算のためにはむしろ使わないほうがよいのではないかと懸念される「電卓の使用」も4割強が、「ヘアードライヤーの使用」は男子で4割、女子で6割強、「誕生会の招待」は男子の59%、女子の74%が「わりと・しょっちゅうある」日常のこととなっている。

図の中で一番体験量の少ないのは「飛行機に乗る」ことであるが、これととも1度は乗ったことのある子どもは3割に達している。便利なもの、新しいものとの接触の体験はかなり多く、まさに「小さなおとな」たちの生活のようすが見てとれる。

こうした自然体験や日常の生活体験の貧困さと、それに反した便利な文化体験の豊富さから浮かび上がってくる、今日の子どもの偏った生活環境。心身の発達途上にあって、自然とのふれあいの中で健やかに育まれていかなければならないはずの子どもたちが、人工的に作られたいわば温室の中で、もやしのようにたよりなげに成長しているように思われる。もし何かの理由で、子どもたちが今後きわめてシビアな生活条件の下に置かれたらどうなるのか。いわば野性を失ってしまったおとなしい動物、小さな小屋の中でえさを与えられなければ暮らせなくなってしまった家畜の姿を連想させられるようである。子どもはもっとワイルドで、大きな適応力とたくましい生命力を持った存在だったはずである。そう考えると、おとなよりもはるかに適応力の幅のせまくなってしまった子どもたちの将来が恐ろしくも感じられる。



図4-9 自然の体験

		(%)			
		ほとんどない	2、3回ある	わりとある	しょっちゅうある
1. 屋根の上を歩く	男子	32.1	22.8	21.3	23.8
	女子	49.7		24.0	15.5 10.8
2. 網での魚とり	男子	24.9	24.2	31.9	19.0
	女子	52.8		29.5	14.0 -3.7
3. 傘が、強い風で オチヨコになる	男子	33.0	38.2	18.7	10.1
	女子	45.2		37.0	13.9 -3.9
4. たき火をする	男子	33.7	33.2	22.8	10.3
	女子	42.6		32.2	19.1 6.1
5. カエルにさわる	男子	12.6	16.6	36.3	34.5
	女子	52.1		23.5	16.4 8.0
6. 学校以外での 植物栽培	男子	24.0	32.2	31.2	12.6
	女子	18.4	28.3	35.3	18.0
7. 雨でビショぬれに なる	男子	11.5	30.5	37.7	20.3
	女子	23.0		45.0	23.5 8.5
8. 草むしり	男子	15.2	29.3	35.0	20.5
	女子	9.0	21.1	46.9	23.0
9. 汲み取り式トイレ の使用	男子	11.4	24.2	30.3	34.1
	女子	8.5	20.0	38.3	33.2
10. 犬や猫をだく、 さわる	男子	7.8	13.0	39.6	39.6
	女子	6.7	13.1	40.6	39.6

(vol.2-10「生活体験」より)

図4-10 文化体験

		(%)				
		ほとんどない	2、3回ある	わりとある	しょっちゅうある	
1. 飛行機に乗る	男子	69.6		17.6	8.4	4.4
	女子	69.2		18.8	9.1	2.9
2. 電卓で計算する	男子	26.9	28.0	27.3	17.8	
	女子	26.9	29.7	29.7	13.7	
3. ヘアドライヤーの使用	男子	30.3	29.7	24.0	16.0	
	女子	13.0	24.3	30.7	32.0	
4. 誕生会に招待したりされたりする	男子	15.7	25.3	39.1	19.9	
	女子	5.8	20.6	44.4	29.2	
5. パースデーケーキのろうそくの火をふき消す	男子	11.9	24.1	40.6	23.4	
	女子	8.7	21.6	44.9	24.8	
6. 写真撮影	男子	7.9	19.3	34.2	38.6	
	女子	10.2	26.1	39.4	24.3	
7. タクシーに乗る	男子	3.7	15.7	47.3	33.3	
	女子	3.3	15.3	55.0	26.4	

(vol.2-10「生活体験」より)



### 3. 立ち遅れた生活習慣の形成



私たちが健康的な、あるいははじめのある社会生活を送るためには、「食事の前に手を洗う」とか、「脱いだ靴をそろえる」などの基本的な生活習慣を身につけなければならない。そしてこの生活習慣は、ふつう小学校入学前にはだいたい確立されることが望ましいのだが、どうも最近では習慣形成のしつけがうまくなされていないということをよく耳にする。実際はどうなのだろうか。

図4-11は、自分の身のまわりの世話や健康のための習慣を、子ども自身がどのくらい身につけているかを表したものである。全体として定着率の高いのは「寝巻きを着て寝る」「入浴後新しい下着を着る」「入浴で体を洗う」「大便後手を洗う」「給食の前に手を洗う」などで、これらは9割の子が「いつでも」、あるいは「だいたい」していることである。

逆に実行率の低いのは、「家に帰ると着替える」「給食の後、歯をみがくか口をすすぐ」

「掃除後手を洗う」「脱いだ靴をそろえる」といったことで、どれも「いつでもする」と「だいたいする」を合わせて4割以下でしかない。

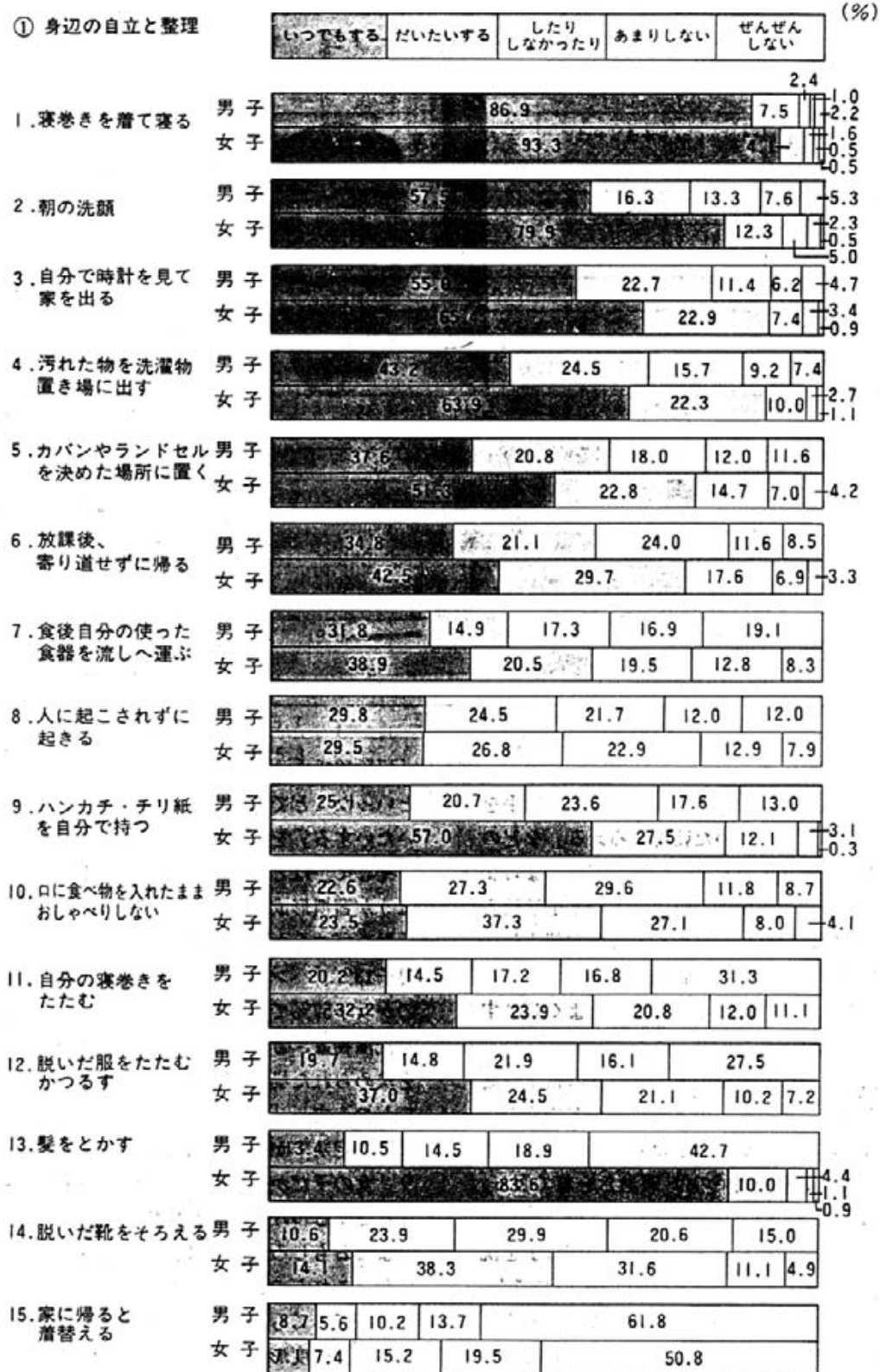
そして、ほとんどの項目において、女子のほうが習慣形成率が高いのが特徴的である。

「髪をいつもとかす」のは女子84%に対して男子13%、「ハンカチ・チリ紙を自分で持つ」のが女子57%で男子25%、さらに「汚れた物を洗濯物置き場に出す」「カバンやランドセルを決められた場所に置く」「脱いだ服をたたむかつかす」「掃除後や給食前に手を洗う」などの定着率がとくに男女差が大きく、やはり「女の子だから……」と親が男の子よりもうるさくしつけた効果がでていられる。

またおもしろいことに、図には示していないが、これらの習慣形成を2年生と6年生で比較してみても、ほとんどその定着率に差がないが、一度形成された習慣が崩れてしまったため、むしろ2年生のほうが高いくらいな

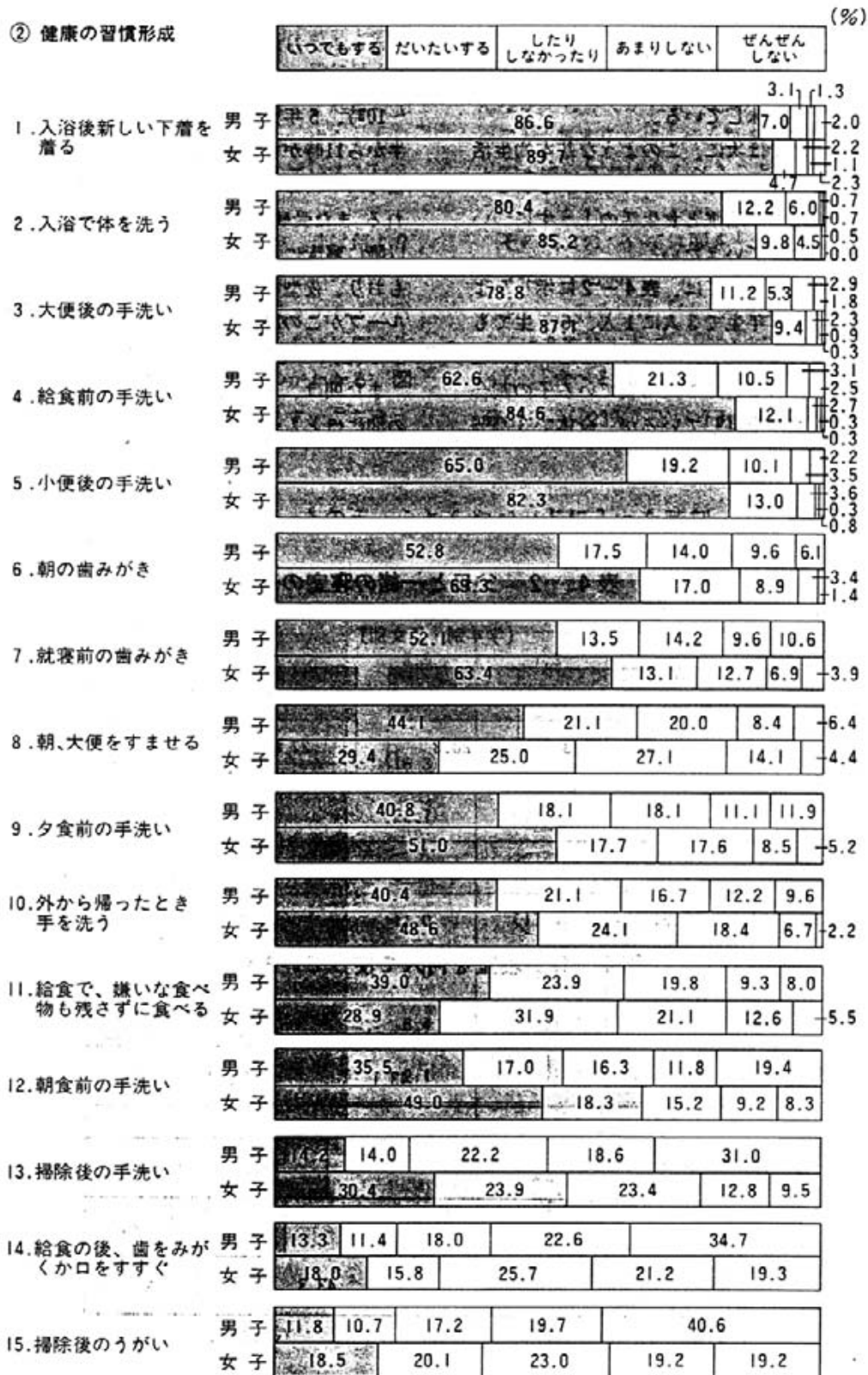
図4-11 基本的な習慣形成

① 身の自立と整理



(vol. 2 - 9 「基本的生活習慣」より)

図4-11 基本的な習慣形成



(vol. 2 - 9 「基本的生活習慣」より)

のである。すなわち、このような身の自立や整理は、小学校2年生の時点で習慣化されていないなら、その先に身につく見込みは薄く、早い時期にしつけることがとくに大切であることを意味している。

さてそれでは次に、このような基本的生活習慣がどのように身についているかを、とくに子どもたちの睡眠と食生活のようすについて具体的にみていきたい。

まず睡眠については、表4-2に示したように、4・5年生で3人に1人、6年生でも5人に1人はお父さんかお母さんと一緒に寝ている。そして自分1人で寝ている子の割合は学年と共に上昇しているが、全体で3割弱

にすぎない(図4-12)。もちろん各家庭の住宅事情もあるだろうが、もう少しなんとかならないものかと思ってしまう。

またふとんに入る時刻は、4年生で8時半～10時、5年生は9～10時半、6年生は9時半から11時が多く、学年が上がるにつれて就寝時刻が30分ずつずれていくようすが見てとれる。また受験勉強のためか、6年生では11時以降に寝床に入る子どもが4人に1人(24%)もあり、夜型の生活スタイルへと移行するグループがこの時点で現れ始めていることがわかる(表4-3)。

また朝は、6時から7時半までの1時間半の間にほとんどの子が目を覚まし、学年差は

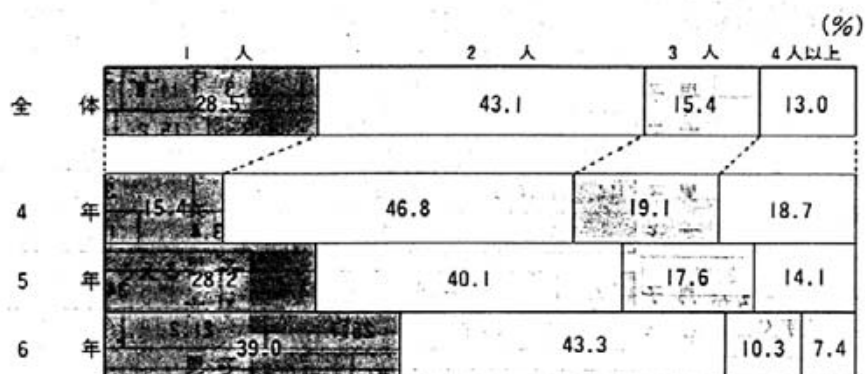
表4-2 父母と一緒に寝る子

[学年別・男女別]

			(%)	
4年	5年	6年	男子	女子
36.9	33.3	20.3	27.8	31.5

(vol.5-2「睡眠」より)

図4-12 寝室を何人で使っているか



(vol.5-2「睡眠」より)



見られない。つまり、睡眠時間が学年を追うごとに少しずつ短縮されていくわけである。さらに図4-13に就寝時刻と起床時刻との関係を記した。図が示すように、一般にはふとんに入る時刻が早ければ早いほど、起床時刻も早くなっていることがわかる。すなわち、夜ふかしが朝寝坊の一因となっているということである。

次に食生活についてであるが、昔は何よりもうるさくしつけられたのが食生活のマナーであった。しかし、今は親のほうがあまり言わなくなったからか、子どもたちは礼儀や作法に対して気を付けていないのがわかる。図4-14のように、「いただきます・ごちそう

さまを言う」や「食事中きたない話をしない」「食事の前に手を洗う」ことくらいは半数以上の子が「いつも気をつけている」が、「間食をしない」「食事中テレビを見ない」「みんながそろってから食べ始める」などは半数の子が「あまり・ぜんぜん気をつけていない」と答えているのは驚くべきことではないだろうか。

その間食については図4-15に示しているように、1週間のうち「おやつを食べない日が多い」、あるいは「ほとんど食べない」という子は2割にすぎず、「たいてい毎日」(35%)、「食べる日のほうが多い」(22%)、「半分半分」(23%)というおやつ状況である。

表4-3 きのうち、ふとんやベッドに入った時刻

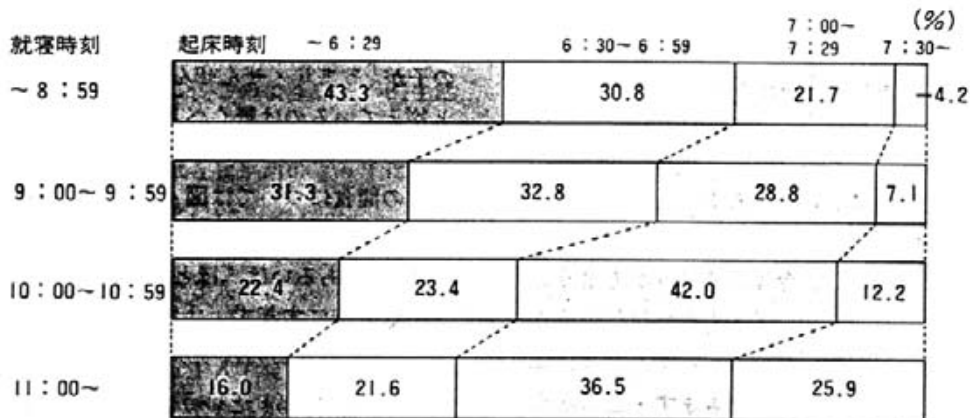
(%)

	4年	5年	6年
8時前	2.5	1.3	1.7
8時～	6.7	3.1	0.6
8時半～	16.3	8.3	4.3
9時～	22.7	21.1	12.6
9時半～	24.2	20.8	20.9
10時～	11.0	17.4	19.2
10時半～	6.0	15.3	16.6
11時～	6.4	9.1	11.2
11時半～	2.1	2.3	9.5
12時～	2.1	1.3	3.4

○印は各学年の多い順に3位まで  
(vol.5-2「睡眠」より)



図4-13 就寝時刻と起床時刻の関係



(vol.5-2「睡眠」より)

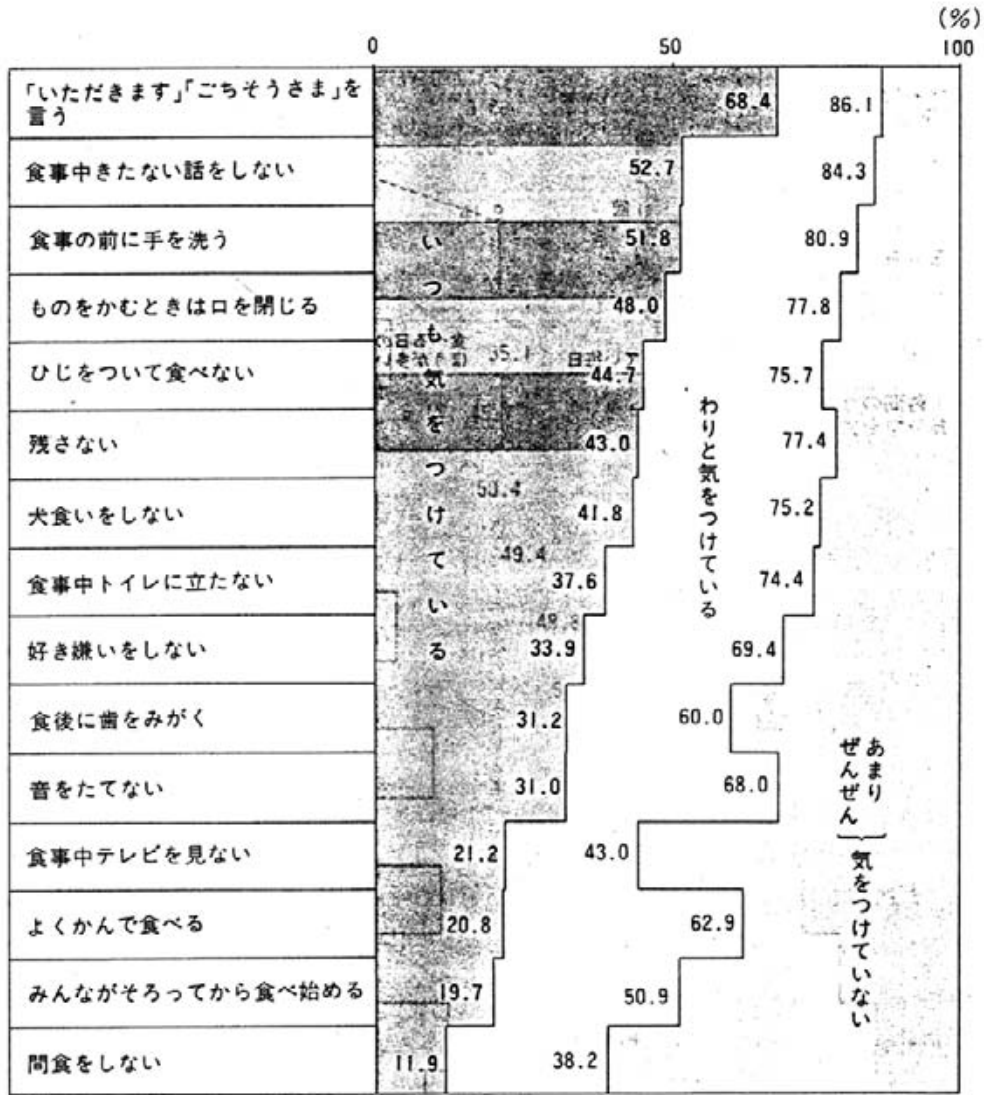
しかもその内容は、スナック菓子や果物、あめ・キャンデー類など、油っぽい物、甘味の強い物が主流で(図4-16)、後の食事で食欲をなくす原因になってしまうだろうし、栄養的にも本来の食事を補うような優れた物とはいえない。

また7割の子が「好き嫌いをしないように気をつけている」と答えているが、図4-17のように、嫌いな食べ物(食品)は77%が1個以上あり、5個以上にのぼる子も15%いる。性別との関連では、とくに女子のほうが偏食の傾向が強い。そして、「偏食が多いか」と

たずねると(図4-18)、3割の子が「とても・わりと多い」と回答していて、その嫌いな物が出てきたとき「ぜんぜん食べない」という子が家の食事では18%、学校での食事では14%いる(図4-19)。

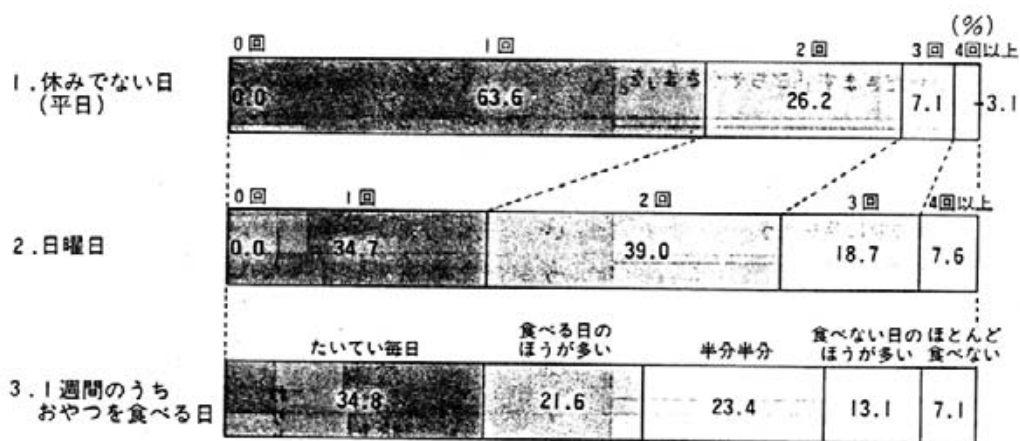
以上、子どもたちの基本的な生活習慣とその周辺確立ぶりをみると、全体として習慣形成の確立の不十分さはいままでの間、その他にもいくつもの問題点が見いだされた。家庭教育の中で「基本的な生活習慣の形成」が十分になされていない現状を、もう一度よく考えてみる必要があるだろう。

図4-14 次のことにどのくらい気をつけているか



(vol.3-1「食事マナーの周辺」より)

図4-15 おやつを食べる回数



(vol.6-4「おやつ」より)

図4-16 ふだん食べているおやつ

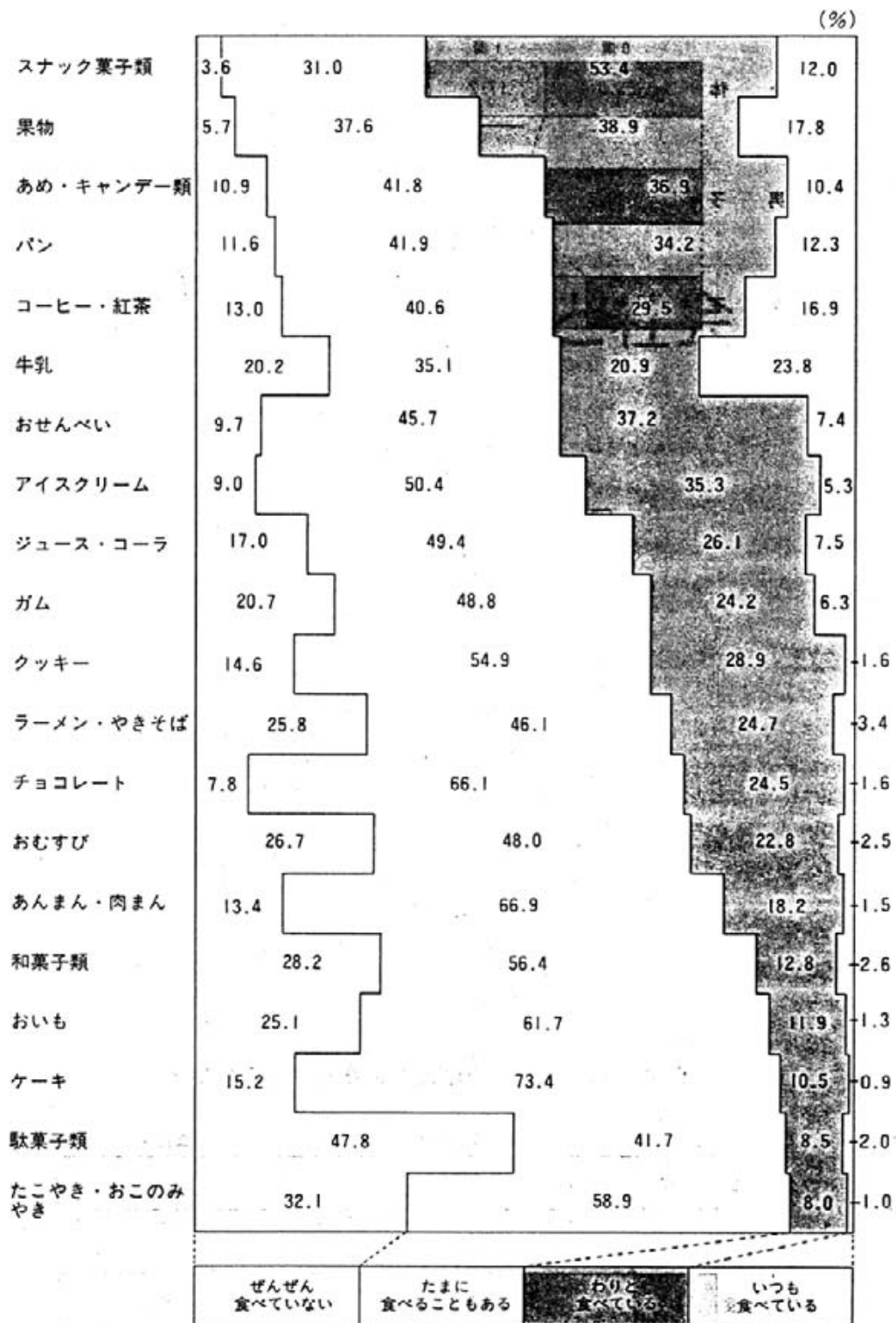


図4-17 子どもの嫌いな食べ物の数

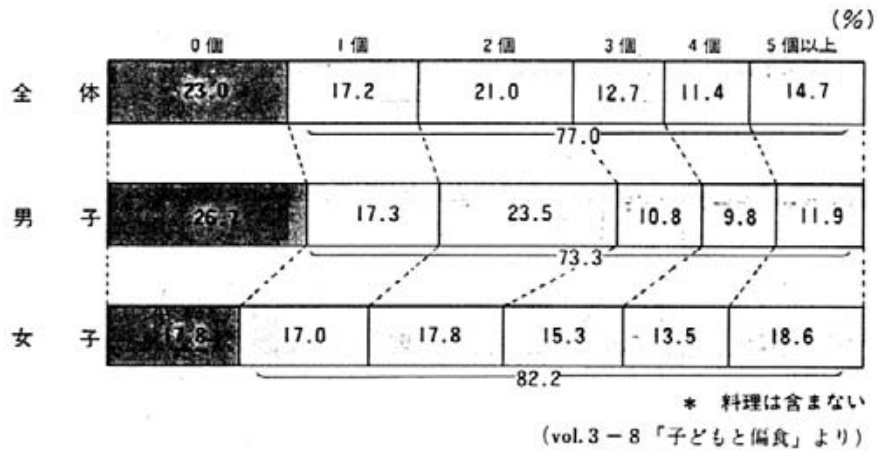
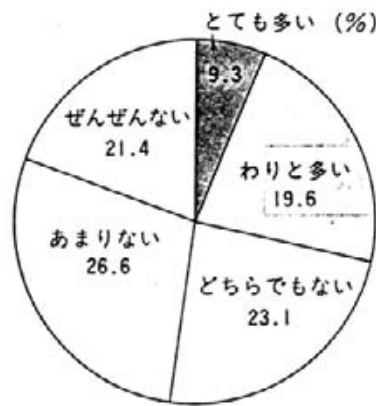
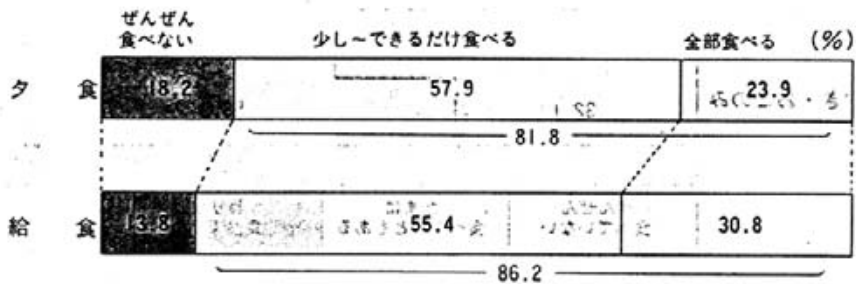


図4-18 好き嫌いが多いほうか



(vol.3-8「子どもと偏食」より)

図4-19 嫌いな物が出てきたときどうするか



(vol.3-8「子どもと偏食」より)